

たより

『美紗の会』 ニュース

第十号

平成五年十一月十八日

発行者

「美紗の会」事務局

☎ 03-3441-2726

第三回 松風会

故西松文一師を偲んで

十一月十一日、渋谷東邦生命ホールにおいて第三回松風会が催された。

今回は『西松文一CD完成記念』と銘打ち松風会・会主西松君子さんを中心に、西松流の家元を継ぐ、わが西松布咏師、それに西松孝子師が企画構成した。
両師の演奏を皮切りに最後は神崎流宗家・三代目家元神崎秀珠師が『珠取り』を舞

うという豪華さ。

さらに、中締めでは日本芸能研究評論の大御所である小山鏡翁師、地唄の演奏家であると共に研究家としても知られる中井猛氏、NHKのディレクターで邦楽については斯界の権威である神止氏の三人が西松師の芸について語るという地唄愛好家にとっては見逃せない機会。
開場の六時半から、続々と

観衆が集まり、開演の七時には満員の盛況。
入り口でさんざめく人波の中には、佐久間会長をはじめ赤坂組の常連、岡崎、小高さんなどなど美紗の会の重鎮の姿も見える。

先ずは布咏師匠の唄と三弦、西松孝子師の琴による『夕顔』で幕開け。師匠がアメリカ公演で大好評を博した源氏物語を主題にした唄、美紗の会会員にとっては意味深い。それが思いを遠く平安の世に馳せる。

二曲目は布咏師匠の独演で『影法師』。軽妙な曲にもかかわらず舞台中央に置かれた緋毛氈に座る師匠の姿が臉に大きく映る。

三氏鼎談は流石その道の大家だけあってぐいぐいと引き付けられる話術。西松文一師の芸、人間像を浮き彫りにする話に時間の経つのも忘れる。最後は神崎秀珠師『珠取り』宗家の舞とはかくも素晴らしくまた凄いのかと、しばし(次頁最下段へ)

ニューヨーク・ベルリン
トウキョウ

詩 ジョン・ソルト
訳詞 西松 布咏

1 舞い手は 音楽の雲の上を
舞うように舞う

2

唄い手は 時折

間を確かめるため

舞い手をかきま見

舞い手は舞いより早く燃え尽
きるろうそくをかきま見る

3 彼女の声は

聴衆を包む絹の布

4 総ての観客は唄い手を見るが

舞い手を聞くのは

一握りの観客だけ

5 彼女の唄は祈り

言葉が肉体を離れるまで

耳の中でこだまし

透明な衣となり

舞い手からみつく

6 結局 才能とは

名のないもの

7 悲しげな唄から

軽妙な三味線から
静かな喜びが
かもしだされる

舞い手がわずかに眉を
ひそめた時

かざした扇の陰で
遊女の悲しい身の上を
菩薩のかすかなほほえみに
変える

8 彼らは そぞろ歩きしながら
世界の内と外を結ぶ
水晶のドアを開けて
未来と過去を行き来する

9 舞い手が去り
唄い手が去ると
ろうそくは消え
ひとすじのけむりが
舞い手の幻影を
あざやかに
浮き彫りにする

NEW YORK - BERLIN - TOKYO

for Nishimatsu Fuei and
the Kanzaki Hidejo troupe
by John Solt

1
the dancer
glides on a cloud
of music

2
the musicians
peek at the dancer
occasionally
to check the timing

the dancer
peeks only
at the candles
burning down
faster than
the dance

3
her voice is a silk cloth
wrapping up the audience

4
everyone can see
the musicians

only a handful
can hear
the dancer

5
her song
is a prayer
it rings in the ear
echoing until
disembodied
it turns transparent
and sticks to the dancer

6
ultimately
talent
has no name

7
from the sadness
of the song
and the droll of the shamisen
rises a quiet joy

just as the slight frown
of the dancer
showing the bitter rind
of the courtesan's life
turns from behind the fan
into a Boddhisattva's
faint smile

8
together
they swing open
a crystal door
and go in and out
of the world
and the last
and the next

9
after the dancer
and musicians leave
the candles are extinguished

smoke rises
repeating in outline
the pattern of the dance

『美紗の会』 会員訪問 (四)

白金教室 増田徳子さん

苦難の時代を越えて今

最初の印象は、国立劇場の「華の会」であった。師匠の母、てるさんと仲良く舞台上に聴き入る増田さんの姿が強く記憶に焼きつけられた。

それから演奏会に行く度に、てるさんと一緒に、僕まじやかながら楽しげな増田さんを見つづけるのが楽しみになった。増田徳子さんこそ師匠の熱烈なサポーターの一人だ。師匠の演奏会だと日立、伊香保まで出掛けるという。

今年の「おひきぎめ」プログラムには初めて増田真知子さんの名前が出た。会場で仲睦まじく座っている二人の姿を見た多くの仲間が娘さんだと思ひ、「お嬢さんですか。同じ趣味でいいですね」と声を掛けた。

ところが「嫁なんです。彼女は筋も良いし、先生が唄も三味線も素晴らしいと言っていますので、こうして一緒にお稽古ができて本当に嬉しいんです」という答えを聞いて驚きまた微笑ましく思った。

話を伺うため師匠の家から五十メートルとは離れていないお宅にお邪魔した。近代建築の瀟洒な二階建。桐朋学園の音楽科に通っているお孫さん、明子(めいこ)

ちゃんが練習するピアノのある応接間に通される。

「息子一家が二、三階、私が一階に住んでいるんです」。真知子さんのご主人に当たるそのご息、正氏は歯科医。職任接近を避けて葛西に診療所を開いている。

もう一人の娘さん久仁子さんは内科の医者で、自由業のご主人と、一家で浦安に住んでいる。

「両方に二人ずつ合せて四人のお孫さんがある立派な一族に囲まれた幸せなお祖母さんだ。しかし徳子さんには最愛の夫、直治さんとの想い出が消し難い。

中央大学法学部を卒業後、大陸への夢を懸け清州に渡った直治氏は昭和十八年に一時帰国、徳子さんと結婚する。徳子さんは湯島で生れた生粋の江戸っ子。小さい頃は当時まだ不忍の池が望めた湯島天神の境内で遊び育った。

そしてエリート女学生が通った府立第一高女に進む。直治さんに伴われ大陸に行った彼女には、主人の庇盾、離別、女兒の出生、死亡、敗戦、引揚げ、主人の復興再会という戦争による過酷数奇な運命が待っていた。ひとつ問

違えば残留婦人と同じ道を辿らなかつたとは誰も言えない。でも今の徳子さんには苦しみは残っていない。インタビューをお願いしたところ、几帳面な文章でメモを準備して下さった。

そこには「主人も私も旅行好きだったので昭和五十年頃から外国、国内と知らない処は少ない位方々に連れて行ってもらいました」と楽しかった頃の想い出が綴られていた。十五年前ふとしたきっかけから近所の橋場さんの娘さんが、小唄を教えていることを知り、ご主人と一緒に小唄の稽古を始めた。

「お主人はまた趣味の磯釣りでは名の知られた人。有楽会という伝統ある釣りの会の会長をつとめ、今でも西伊豆には「マスダ根」と名付けられた釣り場が残っている。徳子さんが大切にしているご主人のことが大きく掲載されている新聞記事の切り抜きがある。

「戦後シベリヤに抑留され、帰国してからは役人。それも四、五年でやめ、官庁出入りのパン屋を始め生活の基礎を作った苦労人だ。いまは貸ビルの社長さん」というのが紹介記事の一部だ。

その直治氏は八年前に徳子さんを残して亡くなった。ご主人の病氣による中断はあったものの今や小唄は増田さんの生活の大きな部分を占めている。

でも練習は稽古古の朝になつて慌ててするくらいだし、「何時も小唄を口ずさむなんてことはありませんよ」と肩に力は入っていない。

彼女にはそれより、地域の老人会が中心になつてしているボランティア活動の方が気に掛かるらしい。そこでは増田さんが会長、橋場てるさんが副会長で活躍している。

「橋場さんは本当に偉い。私と一緒に活動していらつしやるんだけど、何でも献身的になさるし、お世話好きだし感心しています」

常に人を立てることを忘れない苦労人でありながら、益々意気軒昂な新シルバー世代の旗手である。

好きな曲は牡丹刷毛・雨。今日もまた、築地明石町など。そのほか最近習ったものでは山中しぐれ、黒木売り・雪の十日町・おせん・三輪心中などしつとりしたものだ。

最後に師匠と美紗の会について感想。「下手な三味線をつかえつかえ弾いているのに、ちつとも焦れたりなさらないで根気良く教えて下さる。たいへん感服しています。美紗の会には優秀なお弟子

にっぽん丸演奏会

に向けて準備着々

十月二十一日浅草ゴロゴロ会館で「紫穂里の会」という朗読の会が催された。主催者は御馴染の浅野マチ子さん。そして構成演出を担当したのがわが橋場はつえ師。当日、先生はハーフサンングラスを掛け観客席の後方から舞台を見詰める格好の良さ。「ひよつとしたら私は裏の方が向いているのかも知れない」と照

さんやお仲間が沢山いらして皆さんで先生を盛り立てていらつしやる。とても素晴らしい嬉しいことだと思います。これからも、先生が常日頃言つていらつしやるように、楽しみながらのお稽古を続けて行きたいと思ひます」

(大正十一年東京生れ) (文責 齋藤)

「前頁四段目より」
時を忘れ、海の中に引き摺り込まれるような感じを持ったものも多かったろう。
布唄 孝子両師は地方として、秀珠師の芸を盛り立て、観衆に感銘を与えた。
テイナクレコードから発売されるCDは、故西松文一師の地唄演奏二十七曲を収録、神崎秀珠、小山観翁氏など多くの方の寄稿文も載せているという。楽しみである。

『編集雑記』

* 「松風会」での小山観翁、中井猛、神正氏の対談を興味深く聞いた

* 西松文一師の芸風、それを形成した背景、人柄の話には教えられることが多い

* はんなりとした上方の芸風を純粋に守り通した地唄界最後の巨星

* その底には芸人には珍しい身のきれいな、また、自分自身が芸を楽しむとする余裕があった

* そのような話を聞くうちに、わが師匠、布唄師のイメ

ージがだぶってくる

* 布唄師の天手の人柄が、文一師に彼女を後継者に選ばせたのだろう

* その人柄の上に、文一師は多くのものを残していった

* 後は布唄師が歳と共に「よさ」を加えて行くだろう

* 「よさ」とは上手さ、技術の旨さとは異なるものだと観衆師は喝破する

* 布唄師の紐育、ベルリン公演を聴いたソルト教授からの寄稿を得て「松風会」の感激も覚めぬまま本号は編集のスタイルを変えてみた(た)